

高次脳機能障害の生き難さと支援

——支援とナラティブの社会学（4）——

富山大学 伊藤智樹

1 目的

この報告の目的は、高次脳機能障害とその支援に関する事例報告および考察である。高次脳機能障害は、1990年代以降徐々に知られるようになってきた言葉で、交通事故、脳卒中、低酸素性脳症、脳炎などによって引き起こされる脳機能障害を総称する概念である。救命医療の進歩によって、かえって見過ごされる「助かったその後」の問題を抱えるケースが増加すると考えられる昨今、その支援は重大な課題となりつつある。

2 方法

そこで、本報告では、富山県における事例を報告しながら、高次脳機能障害をかかえて生きる苦しみと、それに対する萌芽的な支援の取り組みについて考察する。筆者は、富山県高次脳機能障害支援センターが行う「ピア・サポート事業」に、アドバイザーの立場に関わりながら、調査研究を行っている。高次脳機能障害支援センターとは、2006年度から障害者自立支援法に基づく地域生活支援事業の一環として実施された高次脳機能障害支援普及事業において、各都道府県におかれることになった支援拠点機関である。富山県の場合、支援センターの事業として（つまり、公的支援の位置づけのもとで）ピア・サポートを事業化し、2013年のスタート以降、続けてきている点に特徴がある。本報告では、このピア・サポート事業のうち、ピア相談員との面談（来談者は家族が多いが、本人であることもある）に同席し記録したノーツをもとに、ナラティブ・アプローチによる分析を試みる。（なお、倫理的配慮として、主に面談時の文書による説明によって来談者の協力を得ている。）

3 結果

面談でのやりとりからは、来談者の混沌とする物語が吐き出され受け止められる様を観察することができる。ただし、ピア相談員は時には来談者の物語の筋や登場人物の性格に関して、改変を提案するようなはたらきかけを行う場面もあった。それらの反応も含めて、「ネガティブな感情を受け止める」「改善への希望を提示する」「改善のゆるやかさを受け入れる」「悪い出来事の予測」「支援サービスとつながる」「本人との接し方の修正」「本人の性格づけの修正」とカテゴライズすることができた。これらの反応には、高次脳機能障害の苦しみに照らして合理的であると同時に、来談者との距離を広げるリスクも伴うと考えられる。

4 結論

高次脳機能障害のピア・サポートの事例は、制度的な枠組みに沿った公的支援では手の届きにくい部分をカバーする重要な支援となる可能性を感じさせる。その一方で、自己物語を積極的に語るタイプとはいえない人も少なからず含まれる中で、ある種の緊迫を伴った対話という側面も見受けられる。

文献

・伊藤智樹編著、2013、『ピア・サポートの社会学——ALS、認知症介護、依存症、自死遺児、犯罪被害者の物語を聴く』晃洋書房。